

說
明

一、總力戰研究所設置ノ必要ナル主タル理由

1、武力戰以外ノ思想戰、政略戰、經濟戰等ニ關スル基本的調査研究ノ不充分特ニ從來ノ研究ハ動モスレバ消極的防衛戰ニ惰シ積極的攻勢戰ニ於テ缺クル所多キノミナラズ武力、思想、政略、經濟戰等ヲ一元的ニ綜合セル所謂總力戰ニ關スル體系ノ研究ノ不充分ナル現状ヲ打開スルコト

2、政戰兩略ノ調整ニ於テ缺クル所多キ現状ニ鑑ミ軍官民ヲ通ジ將來國家樞要ノ地位ニ立ツベキ者ノ教育訓練ヲ行ヒ其ノ思想的統一ヲ圖リ以テ政戰兩略ノ一致竝ニ官吏ノ再訓練ニ資スルコト

3、各省割據主義、官民對立ノ觀念ヲ打破シ軍官民ヲ通ズル舉國一

體的新體制實現ノ一助タラシムルコト

ニ 總力戰研究所ノ内容ノ概要

1、所長 勅任官

2、所員 高等官（勅任四名其ノ他概ネ三―四等） 一四名

俸リ
學及
ノハ決定
ハ等ハ尚異

別ニ各廳ヨリ兼任ノ高等官 二〇名

研究又ハ教育ニ從事スル囑託 二〇名

3、研究員 各廳ヨリ簡拔シタル文武官（概ネ五―七等） 二五名

民間ヨリ簡拔シタル者 一〇名

4、參與 各廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ囑託ス 一五名

5、事務官一名、助手五名、書記三名ヲ置クコト

6、研究所ハ庶務、教育部、研究部ニ區分スルモノトスルコト

7、教育概要

イ、教育 期間 概ネ一年

ロ、教育要領

講義、課題作業、相互討議批評、想定ニ基ク
研究

ハ、教育科目

武力戦、思想戦、政略戦、經濟戰其ノ他ノ組
力戰ニ必要ナル諸對策

ニ、研究所ノ機能整備ニ伴ヒ教育訓練スベキ者ノ範圍ヲ擴大シ
若ハ講習會等ヲ開催スルコト

8、研究用圖書及資料購入費並ニ研究及教育ノ爲特ニ歐米、南洋、
滿支方面出張ニ要スル外國旅費ヲ計上ス

9、研究所ノ開設ハ昭和十五年十月トシ之ニ關スル經費ハ第二予
備金ヨリ支出ス

計	庶務	經濟戰	思想戰	政略戰	武力戰	綜合	統轄	事項	
								職員	職員
一							一	所長	事務分坦表
一二 中	△ 一	五 三	二	二	二	三		所員	
十	十							事務官	
五		一	一	一	一	一		助手	△印及業務者
三	三							書記	

研究及教育項目要領

- 一、將來戰ニ關スル綜合的研究
- 二、將來ノ武力戰ニ關スル研究
- 三、戰爭指導ト政略トノ關係ニ關スル研究
- 四、戰爭指導ト思想トノ關係ニ關スル研究
- 五、戰爭指導ト經濟トノ關係ニ關スル研究

英帝國々防大學

一、設立、場所

一九二七年一月一日設立

倫敦市バツキンガム、ゲート九番地

二、管理

海軍省管理下ニアリ總豫算ハ一九三四年七九四〇磅、一九三五年
六二六〇磅（校長ガ陸軍ヨリ出タル爲夫レ丈ヶ前年度ヨリ減ズ）
ニシテ海軍省豫算ニ計上サル但シ右ハ實際ハ三軍各省等分ニ分擔シ
陸、空軍分擔ノ分ハアプロプリエーション、イン、エイドトシテ海
軍豫算ニ加ヘラル印度及自治領ハ分擔セズ 尙三軍以外ノ他省又ハ
屬領ヨリ學生ヲ選出スル場合ハ一人當一八〇磅ヲ納付ス

三、目的

陸海空軍所屬壯年將校及各省官吏中將來國防ノ樞機ニ參畫スベキ有能ノ人物ヲシテ國防上諸般緊密ナル協調連繫ヲ保持セシムル爲國防ニ關スル事項ヲ廣ク研究セシムルヲ目的トス

(一) 元來英國ニハ陸海空軍共各參謀大學校ヲ有シ夫々其ノ學生中ニハ年々他軍將校ノ若干ヲ加ヘ正規ノ教育ヲ受ケシメ以テ三軍ノ協同動作ニ關シ教育ニハ充分留意シツツアリ更ニ三軍共同ノ一大學校ヲ設置シタルハ聊カ屋上屋ノ嫌アルモ我海軍大學校ノ高等用兵研究將校制度若ハ我陸軍大學校ノ專攻科ノ如キモノヲ三軍共通ノモノトシ之ニ文官ヲ加ヘテ專ラ全英帝國國防ト言フ特定ノ研究ヲ行ハムトスルモノナリ

(二) 右設置ノ動機ハ當時三軍ノ統一乃至緊密ナル協同ニ關スル世上ノ批難多カリシニ鑑ミ且又一九二六年一〇月國防問題ヲ主題トス

ル全英帝國會議ガ開催セラレタル爲之ニ先立チ政府ガ本大學ノ開設ヲ決意發表セルモノト察セララル

曰 目的動機ニ關シ傳ヘララル所ハ概ネ敍上ノ通ナル所更ニ英國ニハ總動員機關ニ關シ平時存在スルモノナリシモ之ガ中央機關トモ目スベキモノハ樞密院内ニ存スルモノノ如ク又本國防大學ガ總動員ノ爲ノ最高指導要員ノ養成ニ當リ居ル節アリ
米國ノ陸軍産業學校（海軍ヨリモ學生ヲ送ル）類似ノ目的モ併有スルモノノ如シ

四 職員

(一) 校長 海陸航軍中少將 任期二ケ年
現校長ハメイジャーエネラル、アール、エツチ、エイニングナリ尙初代校長ニリツチモンド海軍中將任命セラレタルガ同中將ハ篤學ノ士ニシテ殊ニ陸海軍ノ協同作戰ニ經驗深ク又各殖民地ニ關

シテモ相當ノ知識ヲ有シ最適任者ト認メラレタルニ依ル加フルニ
全英帝國ノ國防ハ海軍ヲ主位トスル爲旁々海軍省ノ管理下ニ置カ
レ初代校長ヲ海軍ヨリ選出セルモノナルベシ

□ 教官

三軍ヨリ大佐級各一名 任期三ケ年以内
他ニ大學教授、各省官吏、學者、實業家其ノ他廣ク新道ノ專門
家ヲシテ臨時授講セシム
現武官教官ハ

海軍 キヤブテン、エツチ、イー、ホラン

陸軍 プリゲエディヤー、エル、カール

空軍 エヤー、コンモドアー、ダブリユーシヨルト、ド格拉斯

五 學生

(一) 學生定員ハ約三十名トシ海陸軍ヨリ五乃至六名

空軍ヨリ四乃至五名何レモ大中佐級 時ニ少佐アリ

印度及自治領三軍ヨリ一乃至二名

大藏、植民、外務、印度、商務省等ヨリ交番

概ネ計二名

(口) 候補者ハ三軍大學校卒業者及有爲ナル官吏中ヨリ選抜試験合格者ヲ任命ス

六 教 程

一ケ年

七 授 講 課 目

政略、戰略、三軍協同作戰、財政經濟、通商、資源、供給、航運、通信、民間航空等

(終)

米國陸軍產業大學

陸軍產業大學ハ一九二四年二月ノ軍令ニ依リ華府陸軍省ニ創設セラレ
陸軍次官之ヲ管轄ス

イ、目的

本校教育ノ目的ハ戰時全軍需品調辨ノ管理並戰時必要ナル材料及產業組織ノ動員ニ關シ適當ナル方法ヲ確立スル爲陸軍將校ニ對シ必要ナル教育ヲ行フニ在リ而シテ學生ノ課程ハ十箇月トス

本校ハ教官極メテ少數（昭和八年調ニテ校長ノ外教官四名）ナルモ部外ノ講師無報酬ニテ來講スル者多數アリ

學習ハ講義ヲ受クルノ外各種ノ研究問題ヲ控ヘテ個人又ハ委員ヲ以テ研究ス研究問題ノ數例左ノ如シ

調辨管區及其境界、機能、管理並產業ノ豫算統制、政府ノ豫算統

制

日、蘇兩國ノ經濟的、政治的、社會的趨向ニシテ産業動員計畫ニ
資スヘキモノ

英、佛、獨、伊國ニ於ケル經濟資源ノ管理法

米國ノ重要産業ノ深刻ナル研究

産業戰ノ影響

世界大戰ノ經驗ニ鑑ミ勞動ノ適切ナル調整

輸送、物價統制及軍需品ノ戰時調辨ニ資スヘキ主要各方面ノ能力

調査

國防計畫ニ於ケル經濟計畫

外國貿易ノ統制

金融統制機關

燃料及動力ノ保存

戰後ノ産業整理

口、學生ノ配當 總數五四名

補給部 一〇

軍醫部 二

步兵 二

野砲兵 二

海岸砲兵 二

工兵 四

兵器部 七

會計部 一

通信兵 二

化學戰兵 二

航空兵 五

海軍 一五

學生ノ配當ナキ各兵科竝部ハ軍務局ニ希望シ所要數ノ學生ヲ入校セシムルコトヲ得

ハ、學生ノ資格

學生ハ左ノ各項ニ該當スルモノヨリ選定ス

(一) 陸軍大學校ヲ卒業セル者若ハ同校ノ學生タル者

(二) 統帥及參謀學校卒業者ニシテ而カモ卒業ニ當リ參謀適任證ヲ得タル者

タル者

(三) 特殊ノ才能アリトシテ各兵科竝部ノ長官推薦ニ依ル者

以上各項ニ該當スル他「優秀ノ成績」ヲ收メタル將校ナルヲ要ス

尙學生ノ年齢最大限次ノ如シ

中尉 四〇

大尉 四五

少佐

四九

中、大佐

五二

一九三三—一九三四年度入學者總數五十八名ニシテ陸軍四十五、
 海軍十一、海兵二名ニシテ例年ニ比シ多數ナリ

二、卒業學生數（一九三二年度學年ヲ含ム）

三五四名

內海軍及海兵將校

三二

陸軍將校

三二二

「獨逸」國防大學（假稱）

獨逸ニ於テハ一切本施設ニ關スル公表ヲ
ナシアラサルヲ以テ以下述フル所ハ何レ
モ判斷ニ基クモノトス

一、所 在 伯 林

二、設立年次

不 詳

三、校 名

四、目 的

各軍大學校出身ノ大佐、中佐及大佐、中佐相當官ノ軍
關係官吏中ヨリ有爲ノ士ヲ選拔シテ國家總力戰中軍ニ關係アル部門

ニ關スル綜合研究ヲナサシムルニアリ

五、所 屬 國防軍總司令部直轄トス

註、
國防軍總司令部ハ我國ニ於ケル參謀本部、軍令部、陸軍省、

海軍省、航空本部等ヲ綜合セルモノナリ

六、教育方法 現在ノ我國ニ於ケル陸軍大學校式方法ニ非スレテ以前ノ專攻科學生ニ對スル教育ノ如ク專ラ相互研究ニ據ラシム

「ナテス」黨上級指導者養成塾（假稱）

一、設立

二、所在 不詳

三、目的

獨逸國家組織中軍以外ノ部門即チ黨、行政組織全般ノ上、中級指導者ヲ養成シ、各部門ノ聯繫ヲ緊密ナラシメ且單一指導原理ニヨリ綜合國力ヲ發揮セシムルニアリ

註、（部長以上ノ官職ハ塾出身者ニ非レバ就任シ得サル規定アリ）
四、要員選抜ノ標準

「ヒットラー」學校（初等）— 高等中學校— 軍隊服役ノ三過程修了

者中軍人トシテ士官學校ニ殘ル者以外ヲ本塾（シユールンブルグ）ニ入塾セシム

塾、（「ヒツトラール」學校ハ一般ノ「ヒツトラールユーゲント」指導者學校ト異リ更ニ國家ノ中核タルヘキ人材ヲ養成スルタメニ存在スルモノニシテ毎年全国各地區毎ニ最優秀者一、二名宛ヲ集メ千乃至三千名ヲ收容ス、而シテ其標準ハ體力、思想、能力ノ三者トス）

五 教育方法 塾ノ修了年限ハ四ケ年トシ各學年毎ニ異リタル避地例ヘバ第一學年ハ「ミュンヘン」、第二學年ハ「フランクフルト」等ノ如ク、而モ都會地ヨリ遠ク隔リタル山中、湖邊等ニ所在スル塾舎ニ於テ教育ヲ施ス

課業

早朝起床禮拜、宣誓

午前五時ヨリ學科

午後 「スポーツ」

學科ハ講義ヨリモ相互ノ討論、研究ヲ主トシ各班ノ指導者タル「ナ
チ」黨幹部ガ最後ニ判決、講評ヲ與ヘル

「スポーツ」ハ運動競技凡ユル種類ノ外飛行機、「グライダー」自
動車等ノ操縦ニ亘リ何レニ就イテモ或ル基準ニ達セサル種目アル學
生ハ退塾セシメラル

佛國ニ於ケル高等國防研究所

高等國防研究所ハ一九三六年八月十四日附大統領令ヲ以テ創設セラレ同年十月十五日講習ヲ始メタルモノニシテ其目的トスル所ハ陸、海、空ノ三軍共ニ高級將校並參謀將校ノ養成ニハ久シキ以前ヨリ夫々大學校、高等軍事研究所等ヲ設置シ努力シアリト雖三軍ハ勢ヒ自己ノ領域ニ割據シテ全般的ノ研究、三軍間ノ連絡十分ナラス一方國家トシテ國防政策ノ決定及之カ指導ノ爲ニハ單ニ軍部三省ノミナラス他省（外務、大藏、植民、文部、土木省ノ如キ）ノ協力ヲ必要トシ其範圍ハ廣大ナリ

茲ニ於テ陸、海、空軍ノ優秀ナル將校並關係各省ヨリ若干ノ文官ヲ集メ單ニ戰略的事項ノミナラス戰爭指導ニ影響ヲ及ホスヘキ財政經濟、思想等ヲモ研究シ平戰兩時ニ於ケル準備ト協同トヲ容易ナラシメント

スルニ在リ

本研究所ノ講習期間及聽講生ノ數ハ左記條令ニ示ス如ク毎年聯合省令
ヲ以テ定メラルルモノニシテ例ヘハ一九三八―三九年度ノ爲ニハ五箇
月半ノ期間トシ聽講者ハ陸軍將校（若ハ文官）十名、海軍、空軍將校
（若ハ文官）夫々五名トセル如ク通常期間ハ五箇月、人員ハ二十名内
外トス
其條令左ノ如シ

高等國防研究所條令（大統領令）

（一九三六年八月十四日附發布）

第一條 高等國防研究所ヲ創設ス、本研究所ハ戰爭ニ對スル國家的準
備ニ起因スヘキ一般問題ノ綜合的研究竝陸、海、空三軍ノ指導ニ關
スル研究ヲ行フヲ以テ目的トス

第二條 右目的達成ノ爲高等國防研究所ハ左記二種ノ教育ヲナス

イ將校及文官ヲシテ政治、財政、經濟、人口問題等ニ關スル一般事項ヲ平時並戰時ニ於ケル國防ト關係ヲ有スル範圍内ニ於テ熟知セシムルヲ目的トスル一般教育

ロ國家的作戰ノ問題ト之ヲ確定スヘキ各般ノ問題トヲ關聯セシメツツ檢討スヘキ軍事教育

第三條 本研究所ハ教育會議 (Conseil du Perfectionnement) ニ依リ統轄セララル

教育會議ハ國防常設委員會ノ代表タル陸、海、空軍參謀總長ヲ以テ構成セララル

又文部省高等教育局長モ本會議ニ參與ス

第四條 本研究所長ハ通常陸、海、空軍參議官タル將官中ヨリ順次任命セララル

而シテ研究所長ハ他ノ二軍ヲ代表スヘキ二將官ニ依リ輔佐セララル

研究所長及其二輔佐官ハ海軍及空軍大佐ノ提案ニ基キ國防兼陸軍大臣之ヲ任命ス

第五條 研究所長ハ國防常置委員會ニ對シ本研究所ノ教授ニ任セラレヘキ將校及文官ニ關スル必要ナル總テノ提議ヲ爲ス又研究所長ハ國防常置委員會ノ指示ニ基キ其業務計畫ヲ立案シ之ヲ同委員會ニ提出ス

第六條 本研究所ニ於ケル聽講者ハ各軍高等軍事研究所ノ課程ヲ終ヘタル陸、海、空軍大佐又ハ中佐及右相當官タル軍屬ナルヲ本則トシ各軍參謀總長ノ提議ニ基キ關係各大臣之ヲ指定ス
指定スヘキ將校ノ數ハ毎年聯合省令ニ依リ定メラル、研究所ニ分遣セラレタル將校ハ各々其固有ノ大臣ニ隸屬スルモノトス
內務、外務、財政、文部、國家經濟、土木、商業、農業、殖民、遞

信大臣亦各々本研究所ニ聽講スヘキ一官吏ヲ任命スルモノトス之カ
爲國防兼陸軍大臣ノ承認ヲ得ルヲ要ス

聽講ヲ命セラレタル將校及官吏ノ名簿ハ國防兼陸軍大臣ニ依リ官報
ニ公表セラル

第七條 研究所ノ講座開始時日及其期間ハ國防兼陸軍大臣之ヲ定ム

第八條 研究所ノ編制及管理行政ハ國防兼陸軍大臣ノ責任トシ同大佐
ハ省令ニ依リ其細部ヲ規定ス

第九條 研究所ノ編成及運用ノ爲ニ要スル經費ハ國防兼陸軍省豫算ニ
依リ支出セラル

第十條 國防兼陸軍、内務、外務、財政、海軍、空軍、文部、國家經
済、土木、商業、農業、植民、遞信大臣ハ各々本令施行ノ細部ヲ擔
任スルモノトス

閣下第三七二號

案起

昭和十五年八月三十日

決定	裁可
昭和	昭和
年	年
月	月
日	日
施行	施
	昭和
	年
	月
	日

內閣書記官長

內閣總理大臣

內閣書記官長

昭和十五年八月二十九日

內閣書記官長

法制局長官宛

依命通牒

今般內閣別紙要綱依り總力

戰研究所ヲ設置致度ニ付
原勅令案起案上申相成度
関

秘

總力戰研究所設置ニ關スル件

近代戰ハ武力戰ノ外思想。政略。經濟等ノ各分野ニ亘ル全面的國家總力戰ニシテ第二次歐洲大戰ハ本特質ヲ如實ニ展開シ支那事變ノ現段階モ亦カカル様相ヲ呈シツツアリ皇國力有史以來ノ歴史的一大轉機ニ際會シ庶政百般ニ亘リ根本的刷新ヲ加ヘ萬難ヲ排シテ國防國家體制ヲ確立センカ爲ニハ總力戰ニ關スル基本的研究ヲ行フト共ニ之カ實施ノ衝ニ當ルベキ者ノ教育訓練ヲ行フト必要ニシテ此ノ事タルヤ延テ政戰兩略ノ一致並ニ官軍再訓練ニ貢獻スルコト渺カラスト認メラル依テ左記要領ニヨリ總力戰研究所ヲ設置シ總力戰態勢整備ノ礎石タラシムルコト現下喫緊ノ要務タリ

記

一、總力戰研究所ハ國家總力戰ニ關スル基本的研究ヲ行フト共ニ總力戰實施ノ衝ニ當ルベキ者ノ教育訓練ヲ行フト以テ目的トスルコ

ト

- ニ 總力戰研究所ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬スルモノトスルコト
- 三 總力戰研究所ハ所長（陸海軍將官又ハ勅任文官）竝ニ所員若干名ヲ以テ構成シ各廳竝ニ民間ニ於ケル優秀ナル人材ヲ簡拔スルコト
- 四 研究員ハ差當リ文武間及民間ヨリ簡拔シタル者若干名ヲ以テ之ニ充テ其ノ教育期間ハ概ネ一年トスルコト
- 五 研究所ハ至急之ヲ開設シ先ツ所員ヲ以テ總力戰ニ關スル基本的調査研究ヲ行ヒ昭和十六年度ヨリ研究員ノ教育訓練ヲ實施スルモノト豫定スルコト
- 六 本件ニ關スル經費ニ付テハ適當ナル措置ヲ講スルモノトスルコト

閣中第三〇二號

起案

昭和十五年九月三十日

決定

昭和十五年九月三十日

施行

昭和十五年九月三十日

内閣總理大臣

内閣書記官長

内閣書記官長

陸軍大臣

海軍大臣

文部大臣

司法大臣

農林大臣

商工大臣

逓信大臣

陸軍省

海軍省

文部省

司法省

農林省

商工省

逓信省

昭和十五年十月一日

内閣書記官長

總力戰研究所長 宛

今般貴所新設ニ付事務處理並文書取扱ニ關シ左記事項御承知相成度
依命此段及通牒候

記

一、分課規程ノ制定又ハ改廢ハ内閣總理大臣ニ上申シ其ノ決裁ヲ仰グ
コト（官報公示ハ内閣官房總務課ニ於テ取扱フモノトス）

二、主管事項中教育訓練ノ規畫其ノ他重要ナルモノニ付テハ内閣總理
大臣ニ上申シ又ハ閣議ノ決定ヲ請フコト

閣議ノ決定ヲ請フベキモノハ其ノ旨ヲ内閣總理大臣ニ上申スルモ
ノトス

三、國家總力戰ニ關スル基本的調査研究及教育訓練ノ概況ハ毎年定期
ニ之ヲ内閣總理大臣ニ報告スルコト

四、其ノ他文書ノ處理方法左記ノ通

（一）内閣總理大臣、内閣書記官長又ハ内閣ニ宛テタル書類ハ總テ内
閣官房總務課ニ於テ接受ス其ノ所ニ於テ調査起案ヲ要スルモノ
ハ之ヲ其ノ所ニ回付ス

（二）内閣總理大臣又ハ内閣書記官長ノ決裁ヲ經ベキ書類ハ内閣官房

總務課ニ送付スルコト

(三) 内閣總理大臣又ハ内閣名ヲ以テ外部ニ發スル書類ハ原則トシテ内閣官房總務課ヨリ之ヲ發ス其ノ所ノ起案ニ係ルモノハ發送後書類(原議)ハ其ノ所ニ回付ス

(四) 一般ニ文書ノ發送ニ付テハ左記事項留意ノコト

(イ) 内閣總理大臣又ハ内閣書記官長宛發スル公文書ハ宛名人ニ於テ必ズ直接開封スルヲ要スル祕密文書ノ外總テ之ヲ内閣官房總務課宛送付スルコト

(ロ) 發送文書ノ封筒ニハ宛名人ニ於テ必ズ直接開封スルヲ要スル場合ノ外之ニ「親展」ノ表示ヲ爲サザルコト

(ハ) 總テ書類ニハ當該公文書ノ交渉主任者ヲ欄外其ノ他適當ノ所ニ附記スルコト但シ主任者ノ判然セル人事ニ關スル書類又ハ單ニ通報ニ屬スル輕微ナルモノハ之ヲ省略スルモ可ナリ

考

內閣閣甲第三六六號

昭和十三年十二月十六日

內閣書記官長

興亞院總務長官宛

今般貴院新設ニ付事務處理竝ニ文書取扱ニ關シ左記事項御承知相成度依命此段及通牒候

追テ北支那開發株式會社及中支那振興株式會社監督ニ關スル命令書別紙ノ通ニ付及送付候

記

興亞院設置ニ付事務處理竝文書取扱ニ關スル件

一、興亞院分課規程ノ制定又ハ改廢ハ内閣總理大臣ニ上申シ其ノ決定ヲ仰
グコト（官報公示ハ内閣官房總務課ニ於テ取扱フモノトス）

二、主管事項中重要ナルモノハ總テ内閣總理大臣ニ上申シ又ハ閣議ノ決定
ヲ請フコト

三、法律勅令ノ制定又ハ改廢ヲ要スルモノハ總テ内閣總理大臣ノ請議案ト
シテ上申スルコト

四、其ノ他文書處理方法左記ノ通

(一) 内閣總理大臣、内閣書記官長又ハ内閣ヘ宛テタル書類ハ總テ内閣官
房總務課ニ於テ接受ス其ノ興亞院ニ於テ調査起案ヲ要スルモノハ之
ヲ其ノ院ニ回付ス

(二) 内閣總理大臣ノ決裁ヲ經ベキ書類ハ總テ内閣官房總務課ニ送付スル

コト

(三) 内閣總理大臣又ハ内閣名ヲ以テ外部ニ發スル書類ハ原則トシテ内閣官房總務課ヨリ之ヲ發ス、其ノ興亞院ノ起案ニ係ルモノハ發送後書類(原議)ハ其ノ院ニ回付ス

(四) 一般ニ文書ノ發送ニ付テハ左記事項留意ノコト

(イ) 内閣總理大臣又ハ内閣書記官長宛發スル公文書ハ宛名人ニ於テ必ず直接開封スルヲ要スル秘密文書ノ外總テ之ヲ内閣官房總務課宛送付スルコト

(ロ) 發送文書ノ封筒ニハ宛名人ニ於テ必ず直接開封スルヲ要スル場合ノ外之ニ「親展」ノ表示ヲ爲サザルコト

(ハ) 總テ書類ニハ當該公文書ノ交渉主任者ヲ欄外其ノ他適當ノ所ニ附

記スルコト但シ主任者ノ判然セル人事ニ關スル書類又ハ單ニ通報
ニ屬スル輕微ナルモノハ之ヲ省略スルモ可ナリ

内閣閣甲第一一二號

昭和十一年七月一日

内閣官房總務課長

情報委員會委員長

宛（各通）

内閣紀元二千六百年祝典事務局長

〔但シ括弧内ハ内閣紀元二千六百年祝典事務局長宛通牒ノ分〕

今般貴委員會（貴局）新設ニ付文書ノ取扱ニ關シ左記事項御承知相成
度依命此段及通牒候

記

内閣

一、閣議ノ決定ヲ請フベキ案件ハ總テ委員長（局長）ヨリ之ヲ内閣總理大臣ニ上申スルコト、場合ニ依リ内閣總理大臣ノ請議案ノ形式ヲ以テ上申スルヲ可トスルモ此ノ場合ニハ淨書シタル請議書ヲ添附スルコト

二、閣議ニ提出スベキ案件ハ閣議定例日（毎週火曜）前十分餘日ヲ存シ

テ内閣官房總務課ヘ送付スルコト

三、内閣總理大臣、内閣書記官長又ハ内閣ヘ宛テタル書類ハ總テ内閣官房總務課ニ於テ接受スルモノトシ其ノ委員會（局）ニ於テ調査起案ヲ要スルモノハ總務課ヨリ之ヲ其ノ委員會（局）ニ回付スルモノトス

四、内閣總理大臣又ハ内閣書記官長ノ決裁ヲ經ベキ書類ハ總テ内閣官房

總務課ニ送付スルコト

五、内閣總理大臣、内閣書記官長又ハ内閣名ヲ以テ外部ニ發スル書類ハ原則トシテ内閣官房總務課ヨリ之ヲ發ス其ノ委員會（局）ノ起案ニ係ルモノハ發送後書類ヲ委員會（局）ニ回付シ保存セシムルモノトス

六、委員長又ハ委員會名（局長又ハ局名）ヲ以テ外部ニ發スル照會回答等ニシテ事態輕微ナルモノハ之ヲ委員長（局長）限り處理スルコト
七、文書ノ發送ニ付テハ左記事項留意ノコト

(イ) 内閣總理大臣又ハ内閣書記官長宛發スル公文書ハ宛名人ニ於テ必ず直接開封スルヲ要スル祕密文書ノ外總テ之ヲ内閣官房總務課宛送付スルコト

(ロ) 發送文書ノ封筒ニハ宛名人ニ於テ必ズ直接開封スルヲ要スル場合
ノ外之ニ「親展」ノ表示ヲ爲サザルコト

(ハ) 總テ書類ニハ當該公文書ノ交渉主任者ヲ欄外其ノ他適當ノ所ニ附
記スルコト但シ主任者ノ判然セル人事ニ關スル書類又ハ單ニ通報
ニ屬スル極メテ輕微ナルモノハ之ヲ省略スルモ可ナリ

閣印三三二

昭和十五年十月十六日

内閣書記官長

内閣書記官

昭十五 十月十六日

内閣總理大臣 齋藤

法制局長官

外務大臣 齋藤

陸軍大臣 角田

文部大臣 橋本

遞信大臣 坊田

厚生大臣 原

内務大臣

海軍大臣 福

農林大臣 高橋

鐵道大臣 西

星野金書院總裁

大藏大臣 齋藤

司法大臣 重光

商工大臣 齋藤

拓務大臣 齋藤

五

臨時資金審査委員會官制中改正ノ件

起案上申ス依テ別紙ノ通閣議決定セラレ可然ト

十九

認ム

勅令案

別紙ノ通

法
制
局

朕臨時資金審查委員會官制中改正ノ
件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十五年十月二十五日

内閣總理大臣

大藏大臣

勅令第百九十九號

臨時資金審查委員會官制中改正ノ
正ノ

去
司
司

第一條中「第一項」下ニ「會社經理
統制令第四十條及銀行等資金運用
令第五條」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年四月

海備局長

海備局長

海備局長

海備局長

理由

會社經理統制令及銀行等資金運用令
ノ施行ニ伴ヒ臨時資金審査委員會官制
中改正ヲ要スルモノアルニ依ル

參照

●臨時資金審查委員會官制

昭和十二年九月二十七日
勅令第五百三十六號

朕臨時資金審查委員會官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム(總理大臣副署)

臨時資金審查委員會官制

- 第一條 臨時資金審查委員會ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ臨時資金調整法第十二條第一項ノ規定ニ依リ其ノ權限ニ屬セシメタル事項ヲ調査審議ス
- 第二條 委員會ハ會長一人及委員六人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得
- 第三條 會長ハ日本銀行總裁ヲ以テ之ニ充ツ
- 第四條 委員ハ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及日本銀行職員ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
- 第五條 臨時委員ハ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
- 第六條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ内閣總理大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス
- 第七條 委員會ニ幹事ヲ置ク内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及日本銀行職員ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
- 第八條 委員會ニ書記ヲ置ク關係各廳判任官及日本銀行職員ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大日本帝國政府

以下參照

一、關係法規

(1) 臨時資金審查委員會官制（抄）

第一條 臨時資金審查委員會ハ內閣總理大臣ノ監督ニ屬シ臨時資金調整法第十二條第一項、會社經理統制令第三十四條及銀行等資金運用令第五條ノ規定ニ依リ其ノ權限ニ屬セシメタル事項ヲ調査審議ス

第二條 委員會ハ會長一人及委員六人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第四條 委員ハ內閣總理大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及日本銀行職員ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第五條 臨時委員ハ內閣總理大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及日本銀行職員ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

大日本帝國政府

(四) 會社經理統制令 (抄)

第三十四條 前條ノ規定ニ依ル許可ニ關スル處分又ハ指定ニシテ事

案ノ重要ナルモノハ臨時資金審査委員會ノ議ヲ經ベシ

(ハ) 銀行等資金運用令 (抄)

第五條 第三條及前條ノ規定ニ依ル許可ニ關スル處分ニシテ事案ノ

重要ナルモノハ臨時資金審査委員會ノ議ヲ經ベシ但シ第十三條第

二項ノ規定ニ依リ朝鮮總督、臺灣總督又ハ樺太廳長官ノ權限ニ屬

スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

大日本帝國政府

三 經 費

後述ノ如ク臨時委員ヲ増加スル要アルモ既定豫算ノ範圍内ニテ賄ヒ之ヲ増加スルコトナシ

昭和十五年度豫算ハ

大藏省所管臨時部

第二款 調査費 第十一項 臨時資金審査委員會費

九〇〇〇圓

ナリ

大日本帝國政府

三、組織案

會社經理統制令第三十四條ノ規定ニ依リ附議セララルル事案ヲ調査審議セシムル爲

遞信省 電氣廳第一部長

鐵道省 監督局長

ヲ臨時委員ニ追加任命シ、遞信省及鐵道省ノ當該關係官ヲ幹事ニ任命スルノ要アルベシ
尙現在ノ構成左ノ如シ

會長 日本銀行總裁

委員 大藏省理財局長

大藏省銀行局長

農林省經濟更生部長

商工省總務局長

商工省鑛產局長

大日本帝國政府

臨時委員
幹事

日本銀行副總裁

日本銀行理事

內閣會計課長

大藏省理財局金融課長

大藏省銀行局調查課長

農林省經濟更生部金融課長

農林省農村對策部企畫課長

商工省總務局生產擴充課長

商工省鑛產局鑛政課長

日本銀行資金調整局長

日本銀行資金調整局審查課長

法制局佐藤

大日本帝國政府

法制局大第一三三號

昭和十五年十月十二日

秘第一四〇號

會社經理統制令及銀行等資金運用令ノ施行ニ伴ヒ臨時資金審査委員會官制中改正ヲ要スルモノ有之別紙ノ通同官制中改正方御取計相成度此段依命及御依頼候

昭和十五年十月十一日

大藏次官 廣 瀨 豐



內閣書記官長 富 田 健 治 殿

保澤

大正二五九

大日本帝國政府

臨時資金審査委員會官制中左ノ通改正ス

第一條中「第一項」ノ下ニ「、會社經理統制令第三十四條及銀行等資
金運用令第五條」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大日本帝國政府

理由

會社經理統制令及銀行等資金運用令ノ施行ニ伴ヒ臨時資金審査委員會
官制中改正ヲ要スルモノアルニ依ル

勅令第 號

銀行等資金運用令

41

第一條 國家總動員法（昭和十三年勅令第三百十七號ニ於テ依ル場合
ヲ含ム以下同ジ）第十一條ノ規定ニ依ル銀行、信託會社、保險會社、
産業組合中央金庫、商工組合中央金庫、北海道府縣又ハ樺太ヲ區域
トスル信用組合聯合會、朝鮮金融組合聯合會、東洋拓殖株式會社、
臺灣拓殖株式會社、南洋拓殖株式會社（以下金融機關ト總稱ス）及
有價證券引受業法ノ證券引受會社（以下證券引受會社ト稱ス）並ニ
金融機關又ハ證券引受會社ニ非ズシテコール資金ノ貸借若ハ其ノ媒
介又ハ手形ノ賣買若ハ其ノ媒介ヲ爲スヲ業トスル者ニシテ主務大臣

ノ指定スルモノ（以下ビルブローカート稱ス）ニ對スル資金ノ運用ニ關スル命令ニ付テハ本令ノ定ムル所ニ依ル

第二條 主務大臣資金ノ運用ヲ適正ナラシムル爲必要アリト認ムルトキハ金融機關ニ對シ資金ノ運用ニ關スル計畫ノ變更ヲ命ジ又ハ命令ノ定ムル所ニ依リ資金ノ運用方法ヲ指定スルコトヲ得

第三條 金融機關事業ニ屬スル設備ノ新設、擴張又ハ改良ニ關スル資金以外ノ資金ニシテ命令ノ定ムルモノノ貸付ヲ爲サントスルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ此等ノ資金ニ付手形ノ割引ヲ爲シ又ハ當座貸越ノ契約ヲ爲サントスルトキ亦同ジ

第四條 證券引受會社又ハビルブローカー命令ノ定ムル資金ノ貸付ヲ

二

爲サントスルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ此等ノ資金ニ付手形ノ割引ヲ爲サントスルトキ亦同シ

第五條 第三條及前條ノ規定ニ依ル許可ニ關スル處分ニシテ事案ノ重要ナルモノニ付テハ臨時資金調整法第十二條ノ臨時資金審査委員會ノ議ヲ經ベシ

第六條 主務大臣第三條及第四條ノ規定ニ依ル許可ヲ爲スニ付必要アリト認ムルトキハ國家總動員法第三十一條ノ規定ニ依リ資金ノ貸付若ハ手形ノ割引ヲ受ケ又ハ當座貸越ノ契約ヲ爲サントスル者ヨリ必要ナル事項ニ關スル報告ヲ徵スルコトヲ得

第七條 大藏大臣生産力増充資金其ノ他臨時ニ要ナル資金ノ供給ヲ

圓滑ナラシムル爲必要アリト認ムルトキハ銀行ニ對シ資金ノ融通又
ハ有價証券ノ懸案、引受若ハ買入ヲ命ズルコトヲ得

大藏大臣前項ノ規定ニ依ル命令ヲ爲サントスルトキハ資金融通案
委員會ノ議ヲ經ベシ

資金融通案委員會ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 政府ハ前條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ因リ銀行ガ損失ヲ受ケ
タルトキハ銀行ニ對シ通常生ズベキ損失ヲ補償ス

前項ノ損失ヲ決定スル基準其ノ他損失補償ニ關シ必要ナル事項ハ大
藏大臣之ヲ定ム

第九條 前條第一項ノ規定ニ依リ政府ガ銀行ニ對シテ支拂フベキ損失

補償金ハ國債證券ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參照シテ大藏大臣之ヲ定ム

第十條 大藏大臣ハ銀行ガ第七條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ依リ資金ノ融通ヲ爲シタル場合ニ於テ其ノ融通ニ關シ必要アリト認ムルトキハ國家總動員法第三十一條ノ規定ニ依リ資金ノ融通ヲ受ケタル者ヨリ其ノ業務ニ關スル報告ヲ徴シ又ハ當該官吏ヲシテ其ノ業務ノ狀況若ハ帳簿書類其ノ他ノ物件ヲ検査セシムルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ當該官吏ヲシテ検査セシムル場合ニ於テハ其ノ身分ヲ示ス證據ヲ携帯セシムベシ

補償金ハ國債證券ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參照シテ大藏大臣之ヲ定ム

第十條 大藏大臣ハ銀行ガ第七條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ依リ資金ノ融通ヲ爲シタル場合ニ於テ其ノ融通ニ關シ必要アリト認ムルトキハ國家總動員法第三十一條ノ規定ニ依リ資金ノ融通ヲ受ケタル者ヨリ其ノ業務ニ關スル報告ヲ徴シ又ハ當該官吏ヲシテ其ノ業務ノ狀況若ハ帳簿書類其ノ他ノ物件ヲ検査セシムルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ當該官吏ヲシテ検査セシムル場合ニ於テハ其ノ身分ヲ示ス證券ヲ携帯セシムベシ

第十一條 本令ニ於テ主務大臣トアルハ銀行、信託會社、證券引受會社及ビルブローカーニ付テハ大藏大臣、保險會社ニ付テハ商工大臣、商工組合中央金庫ニ付テハ大藏大臣及商工大臣、産業組合中央金庫及北海道府縣ヲ區域トスル信用組合聯合會ニ付テハ大藏大臣及農林大臣、東洋拓殖株式會社、臺灣拓殖株式會社及南洋拓殖株式會社ニ付テハ拓務大臣トス

商工大臣保險會社ニ對シ又ハ拓務大臣東洋拓殖株式會社、臺灣拓殖株式會社若ハ南洋拓殖株式會社ニ對シ第二條ノ命令若ハ指定又ハ第三條ノ許可ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣ニ協議スベシ

第十二條 第一條、第三條、第四條及第六條中主務大臣トアルハ朝鮮、

臺灣又ハ樺太ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督又ハ樺太廳長官トス
第二條中主務大臣トアルハ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事
務所ヲ有スル金融機關ニ付テハ各朝鮮總督、臺灣總督又ハ樺太廳長
官トス但シ朝鮮銀行、臺灣銀行及臺灣又ハ樺太ニ營業所ヲ有シ銀行
法又ハ貯蓄銀行法ノ適用ヲ受クル銀行ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
第七條、第八條及第十條中大藏大臣トアルハ朝鮮ニ本店ヲ有スル銀
行ニ付テハ朝鮮總督トス但シ朝鮮銀行ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
第五條ノ規定ハ朝鮮、臺灣及樺太ニ在リテハ之ヲ適用セズ
第七條第二項ノ規定ハ第三項ノ場合ニハ之ヲ適用セズ
朝鮮總督第七條第一項ノ命令ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣ニ協議

スベシ

一 大蔵大臣前項ノ協議ヲ受ケタルトキハ其ノ協議ヲ受ケタル事項ニ付
資金融通審査委員會ノ議ヲ遵ベシ

朝鮮總督第八條第二項ノ規定ニ依リ損失ヲ決定スル基準其ノ他損失
補償ニ關シ必更ナル事項ヲ定メントスルトキハ大蔵大臣ニ協議スベ
シ

附 則

第十三條 本令ハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ除キ昭和十五年十月二十
日ヨリ之ヲ施行ス但シ、朝鮮、臺灣、樺太及南洋群島ニ在リテハ昭和

十五年十一月五日ヨリ之ヲ施行ス

第三條乃至第六條ノ規定ハ昭和十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十四條 會社利益配當及資金融通令第十二條第一項ノ規定ニ依ル日
本興業銀行ニ對スル資金ノ融通又ハ有價證券ノ應募、引受若ハ買入
ノ命令及同行ノ爲シタル資金ノ融通又ハ有價證券ノ應募、引受若ハ
買入ハ本令第七條第一項ノ規定ニ依リ爲シタルモノト看做シ同令第
十三條第二項ノ規定ニ依リ大藏大臣ノ爲メタル損失ヲ決定スル基準
其ノ他損失補償ニ關シ必應ナル事項ハ日本興業銀行ニ付本令第八條
第二項ノ規定ニ依リ定メタルモノト看做ス

閣甲 二三七

昭和十五年十月二十四日

内閣書記官長

内閣書記官

昭和十五年十月三十一日裁可
昭和十五年十月三十一日公布

内閣總理大臣 友

法制局長官

外務大臣

友

陸軍大臣

友

文部大臣

務

遞信大臣

坊

厚生大臣

屋

内務大臣

友

海軍大臣

西

農林大臣

春

鐵道大臣

西

尋金院總裁

五

大藏大臣

友

司法大臣

草

商工大臣

友

拓務大臣

友

興亞院官制中改正ノ件

起案上申ス依テ別紙ノ通閣議決定セラレ可然ト

去 司 司

法
律
月

認
ム

勅
令
案

別
紙
ノ
通

朕興亞院官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十五年十月三十日

内閣總理大臣

勅令第七百十四號

興亞院官制中左ノ通改正ス

第二條中「調査官 專任十八人」ヲ「調査官 專任十九人」ニ、「事務官 專任十八人」ヲ「事務官 專任二十人」ニ、「技師 專任七人」ヲ「技師 專任十人」ニ、「屬 專任六十七人」ヲ「屬 專任六十八人」ニ、「技手 專任十人」ヲ「技手 專任十二人」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

内 閣

理由

興亞院ノ事務ノ漸次増大セルニ伴ヒ關係統制會社監督ニ關スル事務竝ニ支那ニ於ケル郵政・電氣通信ニ關スル事務、關稅ニ關スル事務、重要礦物資源ノ開發輸送ニ關スル技術、畜産ノ開發ニ關スル技術及化學工業ノ開發ニ關スル技術ヲ擔當セシムベキ調査官一名、事務官二名、技師三名、屬一名及技手二名ヲ増置スルノ要アルニ依ル

法務局 附 第五三號

昭和十五年九月二十日

昭和十五年九月十九日

法務局

前、改訂案に相違セルは

第一、三人増員ラ一人増員ニ至ス
第二、三人増員ラ二人増員ニ至ス

長 殿

興亞院總裁官房

興亞院書記官



興亞院官制中改正ノ件

本年七月二十六日附上申ノ標記ノ件ニ關シ今般經費節減ノ爲別紙ノ通
相違ヲ來タシ候條可然御取計相成度

問 甲 二 三 七

内

閣



朕興亞院官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十五年 月 日

内閣總理大臣

勅令第 號

内閣

興亞院官制中左ノ通改正ス

第二條中「調査官 專任十八人」ヲ「調査官 專任十九人」ニ、「事務官 專任十八人」ヲ「事務官 專任二十人」ニ、「技師 專任七人」ヲ「技師 專任十人」ニ、「屬 專任六十七人」ヲ「屬 專任六十八人」ニ、「技手 專任十人」ヲ「技手 專任十二人」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

内閣

理由

興亞院業務ノ漸次増大セルニ伴ヒ關係統制會社監督ニ關スル事務並ニ支那ニ於ケル郵政・電氣通信ニ關スル事務、關稅ニ關スル事務、重要鑛物資源ノ開發輸送ニ關スル技術、畜産ノ開發ニ關スル技術及化學工業ノ開發ニ關スル技術ヲ擔當セシムベキ調査官一名、事務官二名、技師三名、屬一名及技手二名ヲ増置スルノ要アルニ依ル

内

閣

參照

興亞院官制

第二條 興亞院ニ左ノ職員ヲ置ク

總裁	四人	勅任
副總裁	一人	勅任
總務長官	三人	勅任
部長	專任一人	奏任
秘書官	專任一人	奏任
書記官	專任八人	奏任
調査官	專任十八人	奏任
事務官	專任十八人	奏任
技師	專任一人	奏任
電信官	專任一人	奏任
通譯官	專任一人	奏任
理事官	專任二人	奏任
屬	專任六十八人	奏任
技手	專任十人	判任
電信官補	專任六人	判任
通譯生	專任二人	判任
總務長官ニハ親任官ノ待遇ヲ賜フ		

昭和十三年十二月
勅令第七百五十八號
總理海軍大臣 大藏陸
軍外務大臣 副署



參照

昭和十五年度大藏省所管豫算

歲出臨時部

第二十八款 內閣興亞行政諸費

第一項俸給

第一目 勅任俸給

第五節 調查官

四六五〇〇圓

專任定員百四十八人內減少見込人員二人差引百四十六人及增加見込人員一人計百四十七人ノ内十人ノ俸給一人年俸四千六百五拾圓

第六節 技師

一三九五〇

五十人及增加見込人員四人計五十四人ノ内三人ノ俸給一人平均年俸四千六百五拾圓

第二目 奏任俸給

第三節 調查官

四二六六六〇

專任定員百四十八人內減少見込人員二人差引百四十六人及增加見込人員一人計百四十七



人ノ内百三十七人ノ俸給一人平均年俸參千百貳拾圓但内一人ハ九箇月分

第四節 事務官

三三八、五二〇

專任定員百七人及増加見込人員二人計百九人ノ俸給一人平均年俸參千百貳拾圓但内二人ハ九箇月分

第八節 技師

一四四、七二〇

五十人及増加見込人員四人計五十四人ノ内五十一人ノ俸給一人平均年俸貳千八百八拾圓但内三人ハ九箇月分

第三目 判任俸給

第一節 屬

三〇八、五五一

興亞院屬三百二人及増加見込人員六人、内閣屬專任定員六人計三百十四人ノ俸給一人平均年額九百八拾五圓但内三人ハ九箇月分

第四節 技手

六一、三一六

專任定員六十人及増加見込人員三人計六十三人ノ俸給一人平均年額九百八拾五圓但内三人ハ九箇月分

參照

昭和十五年度大藏省所管豫算

歲出臨時部

第三十款 支那氣象觀測諸費

第一項 俸給

第一目 奏任俸給

第一節 技師

五、七六〇圓

三人ノ俸給一人平均年俸貳千八百八拾圓但内二人ハ六箇月分

第二目 判任俸給

第一節 屬

三、四四七

四人ノ俸給一人平均年額九百八拾五圓但内一人ハ六箇月分

第二節 技手

二、六五九五

三十三人ノ俸給一人平均年額九百八拾五圓但内十二人ハ六箇月分

内閣

增加人員配置表

一五三二八

調査官	事務官	技師	屬手	計
—	—			—
	—			—
			—	—
		三	二	五
—	二	三	一	九
計	—	三	二	九

増員理由

一、經濟部第二課ノ分

現在ハ北支那開發株式會社及中支那振興株式會社監督ノ爲、事務官一名ヲ充テ居ルモ十五年度ヨリハ各會社ニ對シ事務官一名宛ヲ配置

セントスルモノニシテ之ニ依リ事務官一名ヲ増員ス

二、經濟部第三課ノ分

郵政、電氣通信（放送ヲ含ム）ヲ專擔セシムル爲事務官一名ヲ増員ス
現在鐵道地位ヲ充テ一ノ人
郵船回信ヲ充テ一ノ人

三、經濟部第四課ノ分

關稅率ノ根本的改正關稅制度ノ確立海關機構ノ整備等ヲ專擔セシムル爲調査官一名及關一名ヲ増員ス

四、技術部ノ分

イ、重要礦物資源ノ開發輸送ヲ爲技師一名及技手一名ヲ増員ス
（採鑛）
（洗選）
左記ニ止メテ

ロ、畜産特ニ羊毛、皮革ノ改良増産ヲ專擔スル技師一名及獸疫豫防

ヲ專擔スル技手一名ヲ増員ス

ハ、製造工業特ニ物資動員計畫ニ對應スル化學工業ノ開發ヲ專擔ス

ル技師一名ヲ増員ス



興亞院事務處理ニ要スル經費ノ内技術部定員増加ニ關スル件

一、増加定員

技師	三
技手	二

計

五

二、増員理由

- (イ) 重要鐵物資源ノ開發輸送ノ爲技師一名及技手一名ヲ増員ス
- (ロ) 畜産特ニ羊毛、皮革ノ改良増産ヲ專擔スル技師一名及獸疫豫防ヲ專擔スル技手一名ヲ増員ス
- (ハ) 製造工業特ニ物資動員計畫ニ對應スル化學工業ノ開發ヲ專擔スル技師一名ヲ増員ス

三、説明

(イ) 重要鐵物資源ノ開發及輸送ハ現下最緊急ノ國家的要請ナルトモ
 現ニ地質及鐵道ノ專任技師各一名ヲ有スルニ止マリ事務處理上ノ

内閣

缺陷甚ダシキヲ以テ農ニ採礦及港灣ノ専任技師各一名同技手各一名ノ増員ヲ要求セルニ對シ技師一、技手一ノ増員ヲ承認セラレタルニ付兼眉ノ急ニ應ズルタメ採礦ノ技師一、港灣ノ技手一ヲ充員セントスルモノナリ

(ロ) 國防資源トシテノ羊毛、皮革ノ改良増産並ニ棉花、食糧作物等重要農産物ノ増産ハ北支開發上ノ一重點ト認メラルルトコロ現ニ農業水利ノ専任技師一名ヲ有スルニ止マリ事務處理上ノ支障尠カラザルヲ以テ農ニ農産及畜産ノ専任技師各一名、同技手各一名ノ増員ヲ要求セルニ對シ技師一、技手一ノ増員ヲ承認セラレタルニ付兼眉ノ必要ヲ充足スルタメ畜産技師一、獸疫豫防ノ技手一ヲ充員セントスルモノナリ

(ハ) 製造工業方面ニ付テハ從來専任ノ技師、技手ヲ有セズ事務處理上甚ダシキ缺陷ヲ斷ヘツツアリシトコロ製鹽業、苦汁工業、セメント製造業、硫安製造業等支那ニ於テ處理スルヲ要スル製造工業方

内閣

面ノ事務頓ニ繁激ヲ加ヘタルヲ以テ藝ニ技師一名、技手一名ノ増員ヲ要求セルニ對シ技師一ノ増員ヲ承認セラレタルニ付化學工業ノ技師一名ヲ充員セントスルモノナリ
特ニ歐洲戰亂ノ擴大ニ伴ヒ我國工業鹽ノ近海鹽依存政策ヲ強化スルタメニハ主トシテ長蘆、山東兩鹽場ノ増産ヲ促進スルノ要アルモノトス

興亞院事務處理ニ要スル人員增加事務別調

部 課

課 長 項

處理人員 (以印以新規)
 事務別調
 五
 考

(一五九一八)

第三課
 第四課

經濟部

第二課

- 一 鑛山業ニ関スル事項
- 一 製鐵業ニ関スル事項
- 一 石油及石炭液化ニ関スル事項
- 一 物動生産力擴充等他ノ條ニ屬スル事項
- 一 工業(塩、煙草、金)ニ関スル事項
- 一 電氣事業ニ関スル事項
- 一 水道事業ニ関スル事項
- 一 瓦斯事業ニ関スル事項
- 一 商業ニ関スル事項

經濟部
第三課

課 計	都市計畫及関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	及都市計畫関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課 長	陸上交通、航空及氣象 関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	海運、水運及港灣関係 事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課 計	郵政、電氣、通信（放送） 関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	及郵政、電氣、通信（放送） 関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課 長	及都市計畫関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	及都市計畫関係事項	○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○
計		○	○	○	○	○	○	○	○	○

(14.5.15)

經濟部
第四課

<ul style="list-style-type: none"> 一 計畫 一 一級企業 一 鐵道 一 道路、自動車 一 河川、運河 一 港口 一 水力發電 一 船舶 一 電氣通信 	<ul style="list-style-type: none"> 一 計畫 一 一級企業 一 鐵道 一 道路、自動車 一 河川、運河 一 港口 一 水力發電 一 船舶 一 電氣通信
---	---

--	--

<ul style="list-style-type: none"> ● 兼 ○ ○ ○ ○ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ○ ○ ○
---	--

△ 八市動業者
 △ 八市其他業者
 △ 八市無業者
 △ 八市上
 △ 八市下
 △ 八市

八市
 八市
 八市

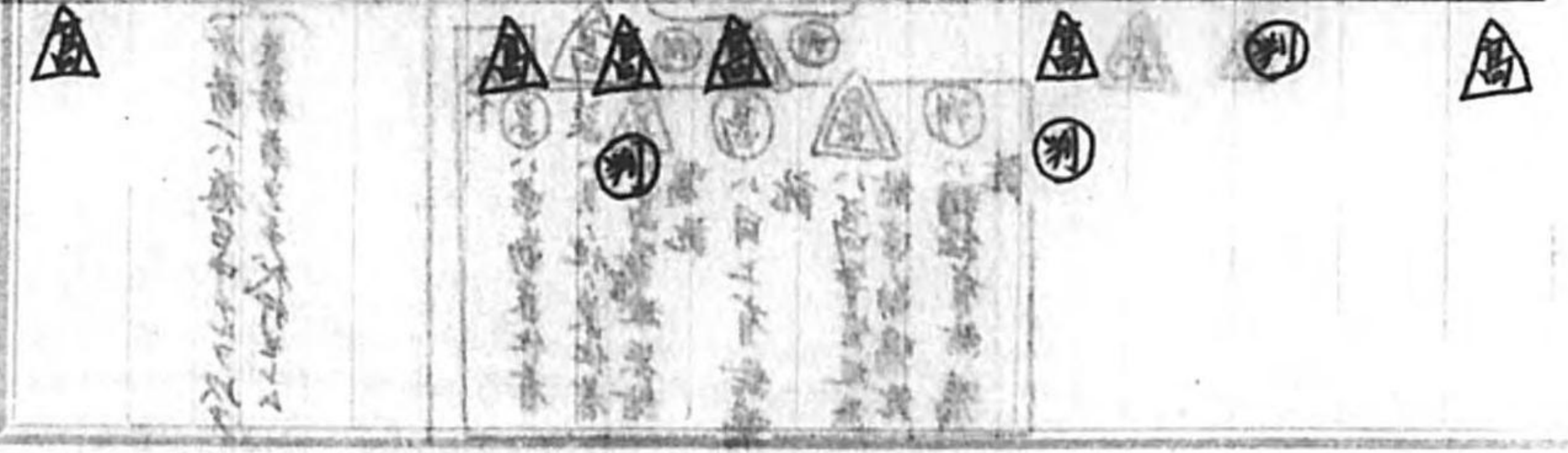
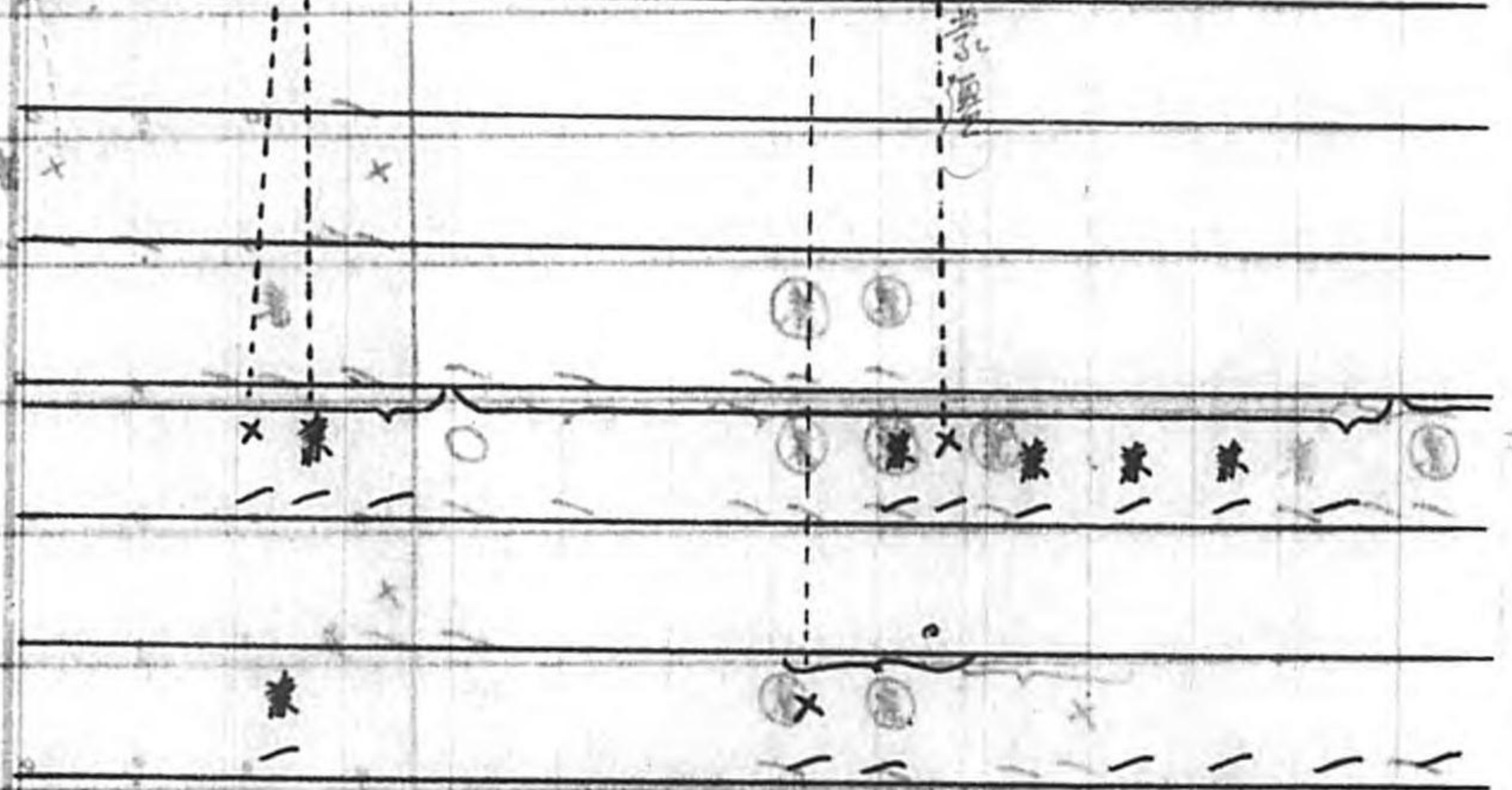
内

期

技術部

技術部

放送	土地改良	農業水利	農業	林業	農林治水	綿花	畜産	獸産	水産	蚕業	氣象	鑛床	株權	鐵鑛	石油
----	------	------	----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----



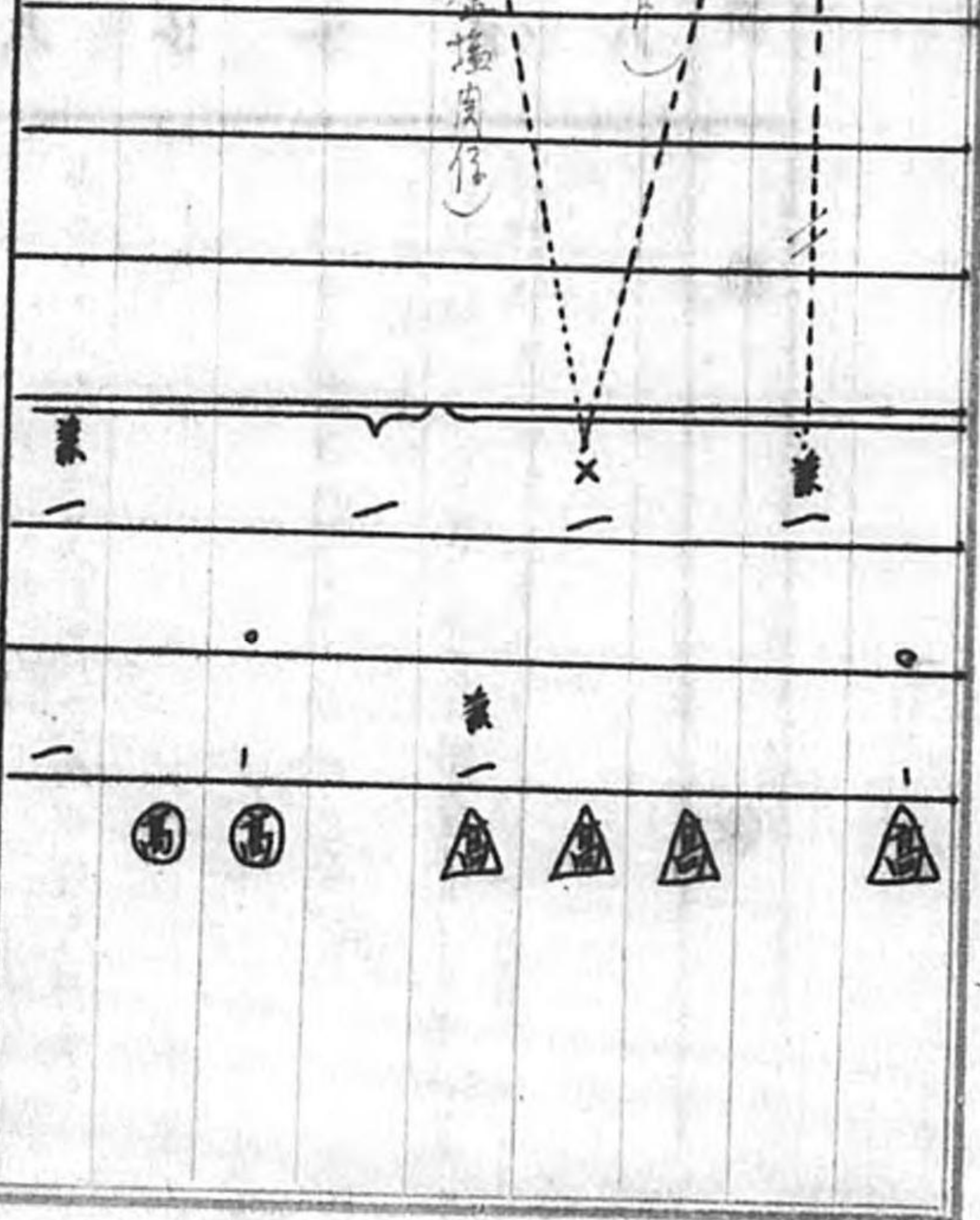
日本標準規格 134 (十四行區)

IMT. 655.

463

333 TMI

一 礦物分析	
一 電氣事業	
一 化學工業	(主)
一 液體燃料	(主)
一 製塩業	(主)
一 豫防、防疫、衛生	
一 醫療	
一 藥品	
一 都市計畫、防空	



興亞院職員現在員調

書記官	調査官	事務官	技師	屬手	
定員	八	一八	一八	七	一〇
現在員	八	一七	一七	七	五八
備考	<p>一、政務部第二課、調査官ニシテ海軍ヨリ銓衡。他ハ経済部第二課長ニ充テ調査官ニシテ農林省ヨリ銓衡ノ也。</p> <p>政務第一課外務省ヨリ銓衡ノ也。</p> <p>最近六人トシテ一人ハ陸軍一人ハ陸軍部ニ轉出。</p> <p>技師部ノ員ニテ採用ニ習ムルニ困難。</p> <p>一人銓衡中</p>				

昭和十五年十月三十日現在

内閣

法制局
第三

法制局周第一〇七號
昭和十五年七月廿七日

昭一五官發第一三二八號

昭和十五年七月二十六日

興亞院總裁公爵 近衛 文 麿



内閣總理大臣公爵 近衛 文 麿 殿

興亞院官制中改正ノ件

事務増加ノ爲職員増置ノ必要アリ仍テ別紙ノ通興亞院官制中改正方可然
御取計相成度此段及上申候

閣甲二三七

内閣

出
印

朕與亞院官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十五年 月 日

内閣總理大臣

勅令第

號

内

閣

興亞院官制中左ノ通改正ス

第二條中「調査官 專任十八人」ヲ「調査官 專任十九人」ニ、「事務官 專任十八人」ヲ「事務官 專任二十人」ニ、「技師 專任七人」ヲ「技師 專任十人」ニ、「屬 專任六十七人」ヲ「屬 專任七十八人」ニ、「技手 專任十人」ヲ「技手 專任十三人」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

理由

興亞院ノ業務ハ漸次増大セル所、特ニ其ノ管ノ下ニ在ル各官署ニ
關スル事務、航空・鐵道・通信ニ關スル事務、關稅・通貨・金融ニ關
スル事務及重要礦物資源ノ開發輸送、畜産・化學工業ノ開發ニ關スル
技術ニ充ツル爲調査官一名、事務官二名、技師三名、屬三名及技手三
名ヲ増置スルノ要アルニ依ル

内閣

興亞院官制抄

昭和十三年
勅令第七百五十八號

「参照」

朱書ノ通改正

第二條 興亞院ニ左ノ職員ヲ置ク

前略

調査官

專任十九人

調査官

專任十八人

奏任

事務官

專任二十八人

事務官

專任十八人

奏任

技師

專任十人

技師

專任七人

奏任
内一人ヲ勅任ト
爲スコトヲ得

屬

專任七十八人

屬

專任六十七人

内閣

以下略

技手
技手

專任十三人
兼任十八人

内

閣

3510-D

